

早稲田大学大学院 創造理工学研究科

博士論文概要

論文題目

カレル・タイゲの一連の論稿に見る建築思想
とチェコの建築の近代化過程

KAREL TEIGE'S ARCHITECTURAL
PHILOSOPHY IN THE MODERNIZATION
PROCESS IN CZECH ARCHITECTURE

申請者

岩澤	錠児
Joji	IWASAWA

建築学専攻 建築意匠論研究

2013年5月

本論文は、20世紀初頭のチェコの建築の近代化過程において思想的側面から重要な役割を果たしたとされる批評家カレル・タイゲ（1900 - 1951）について論じたものである。タイゲは1920年代から東西冷戦にいたる1950年代までのチェコの近代芸術運動の中で多くの言説とタイポグラフィ等の作品を残している代表的人物であるが、その後の政治的状況下において、彼の名前は歴史から抹消されていた。しかし、東西冷戦後からその再評価が始まり、タイゲ研究は現在萌芽的な状況にある中で、本論はタイゲの建築思想の変遷とその枠組みを残された論稿から整理し、当時のチェコの社会情勢と照し合せて体系的な考察を試みるものである。本論の研究方法は、タイゲが残した多様な領域に渡る文献資料の中から、主に建築に関連する論稿を抽出し、それらの言説を新興国家であったチェコの近代建築史の編纂における彼の評価軸、および同時代のチェコの社会情勢に対応した建築思想の推移の二つの側面から整理し分析する。そして、社会主義思想に基づく建築論からシュルレアリスムへと展開される彼の特異な言説について詳細な考察を試みることで、20世紀前半の社会主義に基づく建築運動についての見直しの潮流を担う姿勢を持しつつ、タイゲおよびチェコ近代建築研究の深化をつうじて、ヨーロッパ近代建築史の枠組みに新しい知見を資することを目的とする。

本論は以下に構成される：まず第一章において、チェコの近代国家成立までの歴史的な変遷を示し、そこにタイゲの主に建築に関する活動履歴を重ね合わせることで、本論で取り上げるタイゲの建築思想とその背景となるチェコの建築を取り巻く状況の関係性の理解に奥行きをあたえることを意図する。カレル・タイゲの活動した時代は、19世紀におけるチェコの民族運動の機運を受けた国家的な独立から大戦間の建築を含むアヴァンギャルド芸術運動の興隆、ナチス・ドイツの侵攻によるその終焉、そして第二次大戦後の親ソビエトの政治体制へと移行する時代であり、タイゲの言説とそれら時代背景との同期性を明らかにする。

次に第二章では、タイゲの建築に関する論稿の中から、当時の新興国家であったチェコの近代建築史の編纂に関する彼の言説を整理し、時系列に沿って五つの節にまとめる。これによって、19世紀末からの民族運動の興隆から、20世紀初頭の近代国家としての成立、そして当時の国際的な芸術運動の潮流の中で、構成主義の国際的な波及に対する反応と変遷するチェコの建築の近代化過程に対するタイゲの評価軸を解明する。タイゲは著作『チェコスロヴァキアの近代建築』を中心とした一連の論稿の中で、新興国家としてのチェコの建築の歴史的な基盤をチェコの機械技術の先進性に求めた。民族運動が高まる時代背景の中、ボヘミアの場所性とローマ帝国様式との関連づけた。そこからチェコにおける最初の国民

的建築である「国民劇場」と、その設計者ヨセフ・ジーテクをチェコ近代建築史の起端に置くことでその理論的な基盤を確立しようとしたといえる。そして、ジーテクに置いたチェコにおける建築の近代化の起端から、タイゲはウィーンの影響とチェコ独自の文化の二つの流れを見いだし、その融合としてヤン・コチュエラを位置づけることでチェコの近代建築の系譜を国際的文脈と結びつけることを試みた。また、アドルフ・ロースの装飾論をマルキシズムの経済論から読み直し、ロースを構成主義の預言者として措定することで、チェコの建築の近代化過程における構成主義の系譜の理論的な確立を試みた。そして、国際的な構成主義運動のチェコにおける具現化をヤロミール・クレイツァルに見いだし、構成主義を含む当時のヨーロッパにおける国際的な近代芸術運動の動向に対するチェコの近代建築の立脚点を確立しようとしたといえる。この一連の言説に見られるチェコの建築の近代化過程についての彼の評価軸は、理論のみにあらず当時のチェコの国内外の社会的、文化的状況の状況と克明に照らし合わされたものであり、チェコの近代建築史の編纂における彼の評価軸の一端がここに現れているといえる。

第三章では、1930年代前半のタイゲの建築に関する一連の論稿を整理し、それらの言説を、彼の建築理論の形成において中心的な役割を果たすル・コルビュジェに関する一連の論稿についての節と、当時のタイゲの建築思想の集大成といえる著作『最小限住居(Nejmenší byt)』についての節にまとめることによって、1930年代前半のチェコの建築を取り巻く状況における彼の建築思想の一端を解明する。まず、ル・コルビュジェについての一連の論稿を整理することで、1920年代後半から1930年代前半のタイゲの建築思想の中軸となる主題が編纂される過程が明らかになった。つづいて、著作『最小限住居』において、タイゲは当時の住宅危機の背景に社会構造の問題を見いだし、そこに社会学的なアプローチを試みた。タイゲはこの考え方を基に、当時のヨーロッパの住宅危機の問題に対して、

歴史的な文脈を含む都市の問題、そして階級問題が複合的に関連する社会構造そのものの分析から取り組んだ。タイゲはこれらの多様な領域を架橋しながら、都市・建築における社会階級の問題を抽出し、最終的に女性の解放を目的とした建築論へ展開していった。この建築論の編纂の過程で、タイゲは女性の解放の理念と実際の住宅プランニングの矛盾、ル・コルビュジェ等を中心とする当時の近代建築のデザインと社会階級的な芸術性の矛盾、また、同じくル・コルビュジェを俎上に載せることで当時の近代の都市計画が孕む金融資本的プログラムの矛盾を批判した。これらの一連の言説に見られる、一つの理念に収斂することなく、その実践の状況と照らし合わせながら既存の近代建築という枠組みが内包する二重構造

No.2

を批判し、当時の建築家が提唱する近代建築のスローガンの同一性を解体していく理路を解明していく、この時代のタイゲの建築思想の特質の一端を明らかにした。

最後に第四章では、スターリニズムとナチス・ドイツの台頭という切迫する政治的な状況下において、タイゲがシュルレアリスム運動へと参与する時期の論稿と、第二次大戦を経て、彼の最後の建築論といえる「自然と建築の序説」における彼の言説についての節にまとめる。この一連の論稿から、タイゲの1930年代から晩年にあたる1940年代後半にいたるタイゲの建築思想を解明する。この1939年代後半の一連の論稿において、タイゲは1932年のソビエト・パレスのコンペを契機とするスターリニズムに基づいた社会主義リアリズムの建築の台頭に対して明確に反対の意を示し、そこから本来的な社会主義リアリズムの考えとシュルレアリスムと架橋することでスターリニズムが台頭する状況に活路を見出そうと試みる、1930年代後半のタイゲの思想的な立脚点が明らかにされた。それら一連の論稿を踏まえ、二次大戦直後の1947年の最後の建築論といえる論稿「建築と自然の序論」において、シュルレアリスムと建築的なランドスケープを架橋することで、その二つの世界を振幅する新たな建築論の可能性をタイゲは提示したといえる。そして、絵画史的な観点から人間と自然と建築との関係を考察し、そこから三次元世界におけるシュルレアリスムとランドスケープ論へと展開するタイゲの建築思想は、ヨーロッパ近代建築史において特異なものの一つといえる。また、同上論稿において、タイゲは人間と自然と建築の歴史的、思想的な背景を総括し、近代都市・近代建築という枠組みへの批判から、人間と自然と建築の関係性と、自然と人間の生活についての見直しを試みた。そこに見られる建築思想は、今日の自然環境の問題に相当する主題を含んでいるものであり、ヨーロッパ近代建築史におけるタイゲの自然環境についての先駆的な思想の一端が明らかにされた。

結論においては、序論および本論第一章から第四章を要約し、それをもって本論の全体のまとめとしている。

No.3

早稲田大学 博士（工学） 学位申請 研究業績書

氏名 岩澤錠児 印

(2013年 6月 現在)

種 類 別	題名、 発表・発行掲載誌名、 発表・発行年月、 連名者（申請者含む）
論文（共著、査読付）	カレル・タイゲの一連の論稿に見る建築思想とその変遷-カレル・タイゲ研究（1）-, 日本建築学会計画系論文集第77巻第680号-, 2012年10月, 岩澤錠児, 入江正之.
論文（共著、査読付）	著作『最小限住居(Nejmenší byt)』に見る1930年代前半のカレル・タイゲの建築思想 -カレル・タイゲ研究（2）-, 日本建築学会計画系論文集第78巻 第687号 2013年5月, 岩澤錠児, 入江正之.
学会発表	カレル・タイゲの論説に見るチェコの建築近代化過程における建築思想の推移, 日本建築学会近畿支部研究報告集, 2011年5月, 岩澤錠児, 入江正之. カレル・タイゲ研究 最小限住 The Minimum Dwelling にみるマルキシズム建築論, 日本建築学会大会学術講演会梗概集, 2011年8月, 岩澤錠児, 入江正之. カレル・タイゲの「最小限住宅」論にみる都市、建築思想に関する研究, 日本建築学会大会学術講演会梗概集, 2011年8月, 岩澤錠児, 大石将平.